

比較近現代史からみた『資本論』

内田弘(専修大学名誉教授)

[1] 資本主義の内部の市民革命三段階

図式「市民社会＝ブルジョア社会＝資本主義社会」は、典型的な 1789 年フランス革命のような第 1 市民革命では正しい。その革命は原蓄最終段階＝産業革命ための国家を樹立する。しかし産業革命は、労働運動・民主主義のための闘争・女性解放運動など第 2 次市民革命を引き起こすので、この図式は、典型的な第 2 次市民革命である 1848 年革命以後は誤りとなる。この革命で直接生産者たちはブルジョアジーと法的に対等な関係を樹立する。第 3 次市民革命は現在進行中である。「ジェンダー・エコロジー・マイノリティ・障害者」などの社会的価値を実現している。『資本論』は、第 2 次市民革命直後の社会に焦点を当てている。しかし特に「第 23 章 資本主義的蓄積の一般的法則」で例証されているように、第 3 次市民革命も予見するものである。

[2] 『資本論』に内在する「原始的再帰関数」

通常の想定とは反対に、マルクスはヘーゲリアンというよりはカンティアンである。このことは、哲学的キーワード「仮象」の使用頻度で立証される。カントは『純粋理性批判』を貫通する体系構築用語として、用語「仮象」を 99 回も使用している。この用語は『資本論』第 1 部でも体系的に 26 回使用されている。ところがヘーゲル『論理学』での使用回数はわずか数回である。カント『純粋理性批判』(B70-71)によれば、両極が結ぶ或る関係が両極から自立し、あたかも両極の属性であるかのように転化するとき、仮象が生じる。マルクスはカントに従い、仮象はまず貨幣媒態に転化し、資本主義を多層的な姿態で組織してゆくと、『経済学批判要綱』(ノートⅢ26 頁)で論じる。『資本論』は、カント仮象テーゼを、資本主義の多層をなす仮象で論証している。

商品はすぐれて関係的な形態である。使用価値としての財が商品になるのは、財が近代的私的交換に参入するときである。財の私的所有者が無意識に無限遠点($P\infty$)で使用価値が捨象するとき、私的交換関係は、財の属性としての価値に転化する。『資本論』における価値とは、カントのいう仮象である。「経済学批判」とは、カントの批判哲学を批判的に継承するものである。

価値形態は資本主義の細胞形態である(初版前書)。第一形態は、使用価値[□]をもつ或る商品の価値[■]を、対極の同じ価値[■]をもつ別の商品の使用価値[△]で表現する。第一形態は記号[□→■=□→△]で記せる。相対的価値形態の商品は、等価値形態の商品の使用価値[△]、即ち自己の使用価値[□]の否定的姿態で自己に言及する。価値形態は「否定的な自己言及」である。

価値形態[□→■=■→△]はパラドックスを含意する。記号[□・△]は使用価値(U)としては同種であり、記号[■=■]は価値(V)として同種であるから、価値形態[□→■=■→△]は[U→V:V→U]と書き換えられる。これはパラドックスである。しかしパラドックスは論理的破綻ではない。このパラドックスは「原始的再帰関数」に変換ができる。その関数は(a→b) (-a)と簡略に示される。この関数は、前進することで、自己自身に後方から接近する円環を描く。

価値形態の原始的再帰関数は、資本主義的生産様式を有機的に編成する原理である。内田弘の近著『資本論のシンメトリー』(社会評論社、2015 年)で論証されたように、『資本論』第 1 部は、価値形態の原始的再帰関数でつぎのように、簡潔に提示される。

$$\text{Marx's Capital: } f(\Phi, \Phi, \Psi) = \textcircled{1}\textcircled{2}\textcircled{3}([(\Phi\Psi)^2 \Phi] [(\Phi\Psi)^2 \Phi])^3$$

①＝第一形態、②＝第二形態、③＝第三形態。Φ, Φ (共にファイ)＝①②③に関する 2 種類の反転対称操作。Ψ(プサイ): ①②③に関する回転対称操作)

『資本論』における諸概念は、決して無条件な所与ではない。それは上記の原始的再帰関数の操作によって生成するものである。この関数は、マルクスの 1883 年の死去の後、1931 年にクルト・ゲーデルの「不完全性定理 I・II」で精緻に規定された。マルクスとゲーデルは、原始的再帰関数を共有しつつ近傍で、自分自身の研究課題を各々探求していたのかもしれない。